

初期の海地獄と鉄輪温泉の歴史

別府の「地獄」に関する最初の記録は 8 世紀の「豊後国風土記」に残されたものですが、ここでは地獄という言葉は使われていません。ここでは主に現在の「血の池地獄」であると思われる「赤い温泉」について書かれています。

1276 年に初めて鉄輪に来た僧侶の一遍上人（1239 年～1289 年）が、鉄輪温泉を開いたと考えられています。言い伝えによると一遍上人は夢の中で、危険な煮えたぎる温泉に悩まされている鉄輪へ訪れるようにお告げを受けたとのこと。そして一遍上人は無数の石に経文を書き、それらを温泉に投げ込むことによって、温泉を「埋める」ように言われたのです。そして一遍上人はこの方法でほとんどの地獄を埋めた後、再び夢の中で残りの地獄を利用して人々の病を治すために経文の功力と温泉の効果を組み合わせ、お風呂を作るように言われたのです。これが、この鉄輪地域での最初の湯治場になったのです。

そして江戸時代（1603 年～1867 年）、1845 年に完成した「鶴見七湯廻記」で描かれた絵では、鉄輪の温泉の湯と湯気が食べ物を調理するだけでなく、入浴や治療にも使われ、この地域の資源として利用されていることが記録されています。そして地獄温泉の周囲には茶屋や庭園などの施設も描かれており、この頃にはすでに地獄温泉が地域の文化の一部として確立されていたことが示されています。

旅行者で地理学者でもある古川古松軒（1726 年～1807 年）による 1783 年の記録によると、海地獄はもともと「池の地獄」として知られていたようです。この珍しい名前について地元の人と話し合った古川古松軒は、地元の人ユーモラスな言葉をこのように記しています：「ものを言わない無心の池でも地獄に落ちるので、人間などは推して知るべし」

この「地獄」という言葉は、「油やの地獄」や「酒屋の地獄」など、今はどこにあったのかわかっていませんが、多くの場所で使われていました。